

“Was not this love indeed?”¹⁾
— *Twelfth Night* についての一考察 —

村上 世津子*

(平成10年10月31日受理)

“Was not this love indeed?” : A Study of *Twelfth Night*

Setsuko MURAKAMI*

Twelfth Night is a romance ending with three marriages. However, it is much darker than is generally thought. It is not just Malvolio's threat of revenge and “rain and wind” in Feste's epilog that darkens the play. Rather, the reader finds marriages themselves disgusting. In the subplot, although Maria ridicules Malvolio for his self-love and plots against his ambition to be Count Malvolio, she herself climbs a social ladder by marrying Sir Toby, her lady's uncle. Likewise, in the main plot Viola plans to supplant Olivia by disguising herself as a page to Orsino. Sebastian's marriage to Olivia is a little different, for he does not plot against anybody; but he marries Olivia, knowing there may be some “error” in “this accident and flood of fortune”.

key words: marriage, love, disguise

はじめに

Twelfth Night は Illyria の領主 Orsino と双子の妹 Viola の結婚、並びに父と兄を失い伯爵家を支配している女主人の Olivia と双子の兄の Sebastian の結婚で終わるロマンス劇である。だが Olivia の執事の Malvolio が “I'll be revenged on the whole pack of you!” (V.i.355) という捨てゼリフを残して退場することや、難破した Sebastian を海から救い出したばかりか、その後も支援し続けた船長の Antonio が Orsino の役人に逮捕され本当に友を必要とするときに Sebastian に裏切られたと想って言う言葉 — “how vile and idol proves this god!” (III.iv.316) — の激越な調子や、最後の道化の歌で繰り返される “rain” や “wind” が与える陰湿な響き故に *Twelfth Night* はそれまでに書かれた他の Shakespeare のロマンス劇に比べて悲劇的色彩が強いことが指摘されてきている。W.H.Auden は Shakespeare は喜劇を書く気分ではなかったと言い²⁾、Jan Kott はその劇を “a very bitter comedy”³⁾ と呼び、Philip Edwards は “uncomfortable”⁴⁾ と呼んでいる。そして、大修館シェイクスピア双書の編者は「フェステのエピローグは、もはや祭りの終わりを祝う喜びの歌ではあり得ない。むしろ祭りの解体の歌である」⁵⁾ と言っている。又、Samuel Johnson⁶⁾ や S.C.Sen Gupta⁷⁾ はこの劇の終わりで達成される結婚に疑問を投げかけ E.M.W.Tillyard にいたっては “The idea that Viola and Sebastian had interchangeable souls is a monstrous insult to human nature”⁸⁾ という激しい言葉で、終わりで達成される Sebastian

* 英文学 講師

と Olivia の結婚を非難している。さらには Richard Levin⁹⁾や Dymna Callaghan¹⁰⁾はこの劇の調和にきしみを与える要素は劇の主題そのものと深く関わっていると主張している。とは言え終わりの結婚、特に Viola と Orsino の結婚に異議を唱える批評家は少ない。悲劇的要素の存在は認めつつも、最後に調和が達成されているという見方が主流であり、Arden の編者¹¹⁾も Riverside の編者¹²⁾も New Cambridge の編者¹³⁾も New Penguin の編者¹⁴⁾もこの見解を支持している。それどころか、Viola は男装することによって“the mettle of [her] sex” (V.i.301)や“soft and tender breeding” (V.i.302)に反して誠心誠意 Orsino に仕えたばかりか恋敵であるにも関わらず、兄の死を悼んで 7 年間も世間に顔を見せないと主張する Olivia の頑な心をほぐして結婚を受け入れる心準備をさせる“one heart, one bosom, and one truth” (III.i.143)の持ち主であり、“Patience on a monument” (II.iv.110)を連想させる真実の愛の権化として批評家に賞賛されてきた。

ともすれば忘れられがちになるがこの劇の中で達成される結婚は Orsino と Viola、並びに Sebastian と Olivia の 2 組の結婚だけではない。この劇の終わりで Olivia の侍女の Maria と叔父の Sir Toby が結婚したことが従者の Fabian に報告される。Maria と Sir Toby の結婚に焦点を合わせて主筋の 2 組の結婚を見直すと、その 2 組のカップルの結婚がまったく違った様相を見せる。本稿では Maria と Sir Toby の結婚と主筋の 2 組の結婚を比較して Orsino と Viola、並びに Sebastian と Olivia の結婚について論じたい。

I.

Twelfth Night は Orsino が Olivia に対する恋が報われない切なさを語るるところから始まる。船の難破による水死を危うく免れた Viola は Illyria に漂着する。そして船長から Illyria の領主 Orsino のことを聞き、男装して Cesario と名乗り、小姓として Orsino に仕えるが数日の内に Orsino に信頼されて Olivia に対する恋心も打ち明けられ、Orsino の恋の使いとして Olivia の元に送られる。Viola/Cesario は彼女自身が Orsino の妻になりたいという思いに引き裂かれながらも Orsino のために Olivia に求愛するが、若さと機転の利いた話し方と立派な物腰故に Olivia の心を引きつけてしまう。その結果 Orsino は Olivia に恋し、Olivia は男装している Viola/Cesario に恋をして Viola は Orsino に恋をする変則的な恋の三角関係が生じる。Olivia が自分に恋をしていることを知った Viola は Orsino が Olivia の心を勝ち得る見込みはないと思う。だから Orsino にもう 1 度 Olivia のところへ行って恋を訴えて来るように命令されたときに自分の姉の話という虚構に託して自らの叶わぬ恋を告白し、報いられない恋の苦しさを甘受しなければならないこともあることを忠告する。

She never told her love,
But let concealment like a worm i'th'bud
Feed on her damask cheek. She pined in thought,
And with a green and yellow melancholy
She sat like Patience on a monument,
Smiling at grief. Was not this love indeed? (II.iv.106-111)

このセリフは真実の恋をあまりにも詩情豊かに歌っているのでこのセリフを聞く者は

Orsino でなくても Cesario の「姉」のその後が気にかかり “But died thy sister of her love?” (II.iv.115) と思わず聞きたくなる。13 歳で父と死別し、船の難破によって兄とも死別したと思われる Viola が不幸にもめげずに男装して Orsino に仕え、自らの思いを秘めて Orsino のために Olivia に求愛するけなげさを見てきた観客がこのセリフを聞くと、このセリフはまさに Viola の真情を吐露するものであり、Viola と “Patience on a monument” を同一視したくなる。

Viola が観客ないしは読者の同情心に訴えるのはここだけではない。Viola/Cesario を恋の使者として送っても埒があかないことを悟った Orsino が Viola/Cesario を従えて自ら Olivia に求愛しに行つて断られたときに Orsino は Olivia の愛を横取りした Viola/Cesario の命を奪うと言う。無実の罪で殺されかかるときに Viola/Cesario が言うセリフ “And I, most jocund, apt, and willingly, / To do you rest, a thousand deaths would die” (V.i.121-22) も観客の心に Viola の Orsino に対する愛の深さを印象づける。“Patience on a monument” のセリフで勝ち得た観客の同情を Orsino への愛のためなら何千回でも死ぬというセリフで強化しているので *deus ex machina* 的に双子の兄の Sebastian が登場して Olivia と結婚し、紛糾していた愛情のもつれが解決して Orsino と Olivia も結ばれると happy ending が達成されたような感じがしても不思議ではない。しかしこの劇の終わりで言及されるもう 1 つの結婚 — Maria と Sir Toby の結婚 — に視点を移して Maria と Toby の結婚について考えた後で、もう 1 度主筋の 2 組の結婚を見直すならば、観客ないし読者は最初とは 180 度異なる印象を持つにいたる。次項では Maria と Sir Toby の結婚について考察する。

II.

Orsino の恋の使いの使命を受けて Viola が赴く Olivia の館では、階上で Olivia が兄の死を悼んで 7 年間の喪に服している間に、階下では居候である叔父の Toby と、Olivia に求愛している頭の弱い騎士 Andrew と、道化の Feste が飲めや歌えのどんちゃん騒ぎを繰り広げる。あまりにも度を越した騒ぎぶりに執事の Malvolio が “Is there no respect of place, persons, nor time in you?” (II.iii.79) と苦言を呈すると Toby は “Art any more than a steward / Dost thou think because thou art virtuous there shall be no more cakes and ale?” (II.iii.97-99) と言り返す。Malvolio の言葉を不快に思うのは Sir Toby だけではない。Maria 自身もこの “uncivil rule” (II.iii.104) に手を貸すことによって、お姫さまの恩を仇で返しているという Malvolio の非難が腹に据えかねたので、Malvolio に悪戯を仕掛ける。すなはち、お姫さまが彼に恋をしていると思いこませるべく、お姫さまの筆跡をまねて恋文を書き Malvolio に拾わせる。Maria の予想通り、偽の手紙をお姫さまが自分に当てた本当の手紙だと思いこんだ Malvolio は手紙に指示されているとおりに Sir Toby や Maria に横柄な態度をとり、Olivia にニヤニヤ笑いかけ、黄色い靴下に十字の靴下止めのいでたちで現れて Olivia に狂ったと思わせる。そして Olivia が Sir Toby に介抱するように命じると Maria と Sir Toby らは治療のためと称して Malvolio を暗室に閉じこめ、さんざんなぶり者にするので、Malvolio はこの劇の終わりで暗室から出された後でも大団円に加わらないどころか “I'll be revenged on the whole pack of you” という捨てゼリフを残して退場す

ることによって 最後で達成されたかに見える happy ending を脅かす。

Maria の書いた偽手紙は宛名も差出人も明記されていないのだから、もし Malvolio が自惚れていなければ Maria の偽手紙にだまされることはなかったであろう。2 幕 5 場で Sir Toby と Sir Andrew と Fabian が木の陰に隠れているところへ登場する Malvolio は Maria の手紙を拾う前からお姫さまが自分に懸想していると思っていて自分がお姫さまと結婚して Count Malvolio になることを夢想している。しかもその手紙は差出人が恋する人は “M.O.A.I” であると明記してあり、Malvolio はそのままでは自分の名前とぴったり一致しないことに気づいている。そしてもし Malvolio にユーモアを解する心があったなら、最後で犯人が分かった後で “I’ll be revenged on the whole pack of you” という脅迫めいた言葉を口にする代わりに笑ってやり過ごすことができたかもしれない。とするならば、Malvolio を暗室に閉じこめて狂人扱いすることは決してやりすぎではなく Malvolio の自惚れ病を治すための教育だとする解釈¹⁵⁾や楽しいジョークであるという Fabian の主張 (Vi.344-45)には一理あるような感じがする。

「教育」というのは教育を受ける相手を向上させることを目的にしている。しかし、Malvolio に対するいたずらは Malvolio に彼の欠点を直視させてそれを矯正することを目的にしたり、あるいは楽しいジョークと言うには度を越した執拗さがある。Malvolio が Maria の手紙を読んで妄想を一層たくましくするのを木の陰に隠れて見て笑った直後に悪戯の仕掛人達が木の陰から出て、タネを明かしたなら上質のジョークになっただろう。手紙に指示されたとおりに Malvolio が Olivia の前で奇妙な振る舞いをして狂人だとみなされた直後にタネを割ってもまだ楽しいジョークであり続けることができただろう。しかし実際にはタネを割るどころか Maria は妄想に気づかせないようにするために Malvolio の後に付いていくようにと Toby らに言う。悪戯の仕掛人の 1 人である Fabian が、そんなことをすれば Malvolio が本当に気が狂うと心配しても Maria はその方がよいと冷たく言い放ち、Toby が Maria の考えを支持して、いたずらはエスカレートして彼を暗室に閉じこめるにいたる。

Maria: Nay, pursue him now, lest the device take air and taint.

Fabian: Why, we shall make him mad indeed.

Maria: The house will be the quieter.

Sir Toby: Come, we’ll have him in a dark room. (III. iv. 111-115)

そしてその悪戯は仕掛人の 1 人である Toby が “I would we were well rid of this knavery. If he may be conveniently delivered, I would he were” (IV. ii. 54-55) と言ってからも尚しばらく続き、最早 Malvolio が悪戯の仕掛人のみならず、Olivia の館の人の誰とも和解できないところまで進展して後ようやく終わる。

Malvolio が自惚れ病にかかっていることは既に見てきたとおりであるが、それはそもそも矯正されなければならない性質のものだろうか。Malvolio が道化を酷評する言葉を聞いて Olivia は Malvolio のことを “you are sick of self-love” (I. v. 73) と言うことは確かであるが、Olivia は “There is no slander in an allow’d fool” (I. v. 76) と言って道化の弁護をする一方で “nor no railing in a known discreet man though he do nothing but reprove”

(I.v.76-77)と言って Malvolio の弁護もしている。どんちゃん騒ぎをする Sir Toby らに苦言を呈する Malvolio の言葉が相手への思いやりや Olivia の叔父という Sir Toby の立場の考慮に欠けるものであることは確かだが、Olivia がその騒ぎをやめさせるために Malvolio を送ったことは Maria の認めるところである(II.iii.63-64)。さらには、自惚れの欠点があるにしても Olivia は Malvolio のことを重用していて、彼女の手参金の半分を出しても Malvolio を失いたくはないと思っているほどである(III.iv.57)。とするならば Malvolio いじめは決して「教育」なんかではなくて、せっかくの楽しみを Malvolio に台無しにされた Maria たちの鬱憤を晴らすための手段にすぎないと言える。事実、Malvolio に悪戯を仕掛けるときに Maria は“revenge”という言葉を用いている：“and on that vice in him my *revenge* find notable cause to work” (II.iii.128-129 強調筆者)。

しかし Malvolio いじめが問題なのはそれが喜劇のジョークの範囲を逸脱していて最後に Malvolio が “I'll be revenged on the whole pack of you” という捨てゼリフを吐いて退場せざるを得ないところにまで追いやるからだけではない。それ以上に問題なのはこの劇の終わりで Fabian が Maria と Sir Toby が結婚したことを告げることである。Malvolio いじめの真相が分かったときに Olivia は “when we know the grounds, and authors of it, / Thou shalt be both the plaintiff and the judge / Of thine own cause” (V.i.332-334) と言ったが、Olivia の叔父である Sir Toby と結婚して Olivia の親戚になることによって、Maria はおそらく罰を免れたであろう。更に問題なのは Maria は Sir Toby とともに、Malvolio が執事の分際でお姫さまと結婚して伯爵になることを夢想する思い上がりを嘲笑し、その思い上がりを利用して Malvolio に悪戯を仕掛け、彼を破滅させたが、彼女自身は Sir Toby と結婚することによって身分の上昇を夢想するどころか実現させることである。これは甚だしく公平感に欠く。

III.

Maria と Sir Toby の結婚が観客や読者に不快感を与える原因は Maria だけにあるわけではない。Malvolio いじめをする時は Sir Andrew も Sir Toby らと共に Malvolio いじめを楽しむが、Sir Toby は Sir Andrew をも物笑いのタネにする計画を立てる。Sir Andrew は Olivia が公爵の使いにばかり気を取られていて自分のことは歯牙にもかけてくれないと Sir Toby に不満を漏らす。すると Sir Toby らはそれこそ Olivia が Sir Andrew の気を引くためにしたことであって、あの若者に決闘を申し込んで勇気のあるところを見せるしかないと言得する。Sir Toby らが Sir Andrew に決闘をけしかけるのは相手の若造も女みたいで弱そうだから弱い者同士がこわごわ決闘の真似事をしているのを高みの見物で楽しもうとしてのことである。しかし実際は Sir Toby が計画したようには事が運ばない。いざ Sir Andrew と Cesario が決闘する段になって Viola/Cesario のことを Sebastian と間違えた Antonio が Sebastian への友情故に助太刀にはいるがそこに Orsino の役人が通りかかり、お尋ね者の Antonio は捕らえられる。連行される Antonio に対する Viola/Cesario の態度を見て、Sir Andrew は憶病の上に不実でもあると思い、後に再度襲いかかるが、Cesario だと思った人物が実は Sebastian であった。とても Sir Toby と Sir Andrew に歯が立つ相

手ではなく、果たして、その2人は Sebastian に頭をかち割られる。自らも深手を負っている Sir Andrew が Sir Toby に助けを申し出ると Sir Toby は “Will you help — An ass-head and a coxcomb and a knave, a thin fac'd knave, a gull?” (Vi.190-191) という激しい言葉で Sir Andrew を罵り、彼の申し出を拒絶する。Sir Toby はこれまで姪と結婚させてやると Sir Andrew に持ちかけては金を巻き上げてきたが、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎ故に、どちらかと言えば Falstaff 的な陽気な側面が前面に出ていた。しかし、ここで Sir Andrew との付き合いが金を巻き上げるだけでないことを悟ると、手のひらを返したような冷たい態度を示す。金持ちなだけで知恵も勇気も持ち合わせていない Sir Andrew は今や完全に Olivia への望みを絶たれて、1人寂しく故郷に帰らなければならない。

Richard Henze は Sir Toby と Malvolio と Sir Andrew について次のように述べている。すなわち、Sir Toby の支配は Olivia と Viola に対する礼儀に欠くものであるが、彼には Malvolio の悪意はないから Maria は Sir Toby の欠点をはっきりと認識しつつも、2つの悪のましな方を選んで Sir Toby の肩を持つ。そして Sir Andrew については、絶対的な悪意と絶対的な知恵の欠如は矯正することができないので Malvolio と同様に私たちの手には負えないと述べている。¹⁶⁾ Malvolio については既に検討してきたが Sir Andrew も Henze の言うような「絶対的な知恵の欠如」ではない。Sir Andrew が頭が弱いことは自他ともに認めるところであるが彼は自分がお姫さまに愛されていると思いこんでいる Malvolio と異なり、自分が Olivia の愛を勝ち得る見込みがないことに何度も気づいている。Sir Andrew は3幕2場で Olivia は公爵の使いに夢中になって自分のことは相手にしてくれないと不満を述べるだけでなく、この劇の最初から公爵自身が Olivia に求愛しているのだから自分に勝ち目はないと思っていた。そして自分には望みがないから帰るというたびに Sir Toby に彼女は身分についても年齢についても知恵についても、彼女より上の相手とは結婚する意志がないから希望が持てるのか(I.iii.89-90)、それこそおまえの気を引くためにやったことだ(III.ii.8)と言って丸め込められ、あだな望みを抱き続けさせられてきた。もし Sir Toby らが強行に事実をねじ曲げなければ、彼はあきらめてさっさと帰ったであろうし、散財することも防げたであろう。

Sir Andrew は Olivia だけを彼の結婚相手として考えるのではなく Maria にも思いを寄せている。いやむしろ、Olivia に対する思いはあきらめが先行しているのに対して、Maria に対する思いでは脈があると感じているフシがある。たとえば2幕3場で Maria の偽手紙に Malvolio がすっかりだまされたのを見た直後で Sir Toby が Maria に思いを寄せられていると言うと、Sir Andrew も “I was adored once, too” (II.iii.153) と答える。また2幕5場で Sir Toby が Maria のことを、こんな面白い悪戯を考案した報酬に持参金なしで Maria と結婚しても良いと言うと、Sir Andrew は自分もそうだと言う(II.v.151)。Sir Toby は Olivia については Sir Andrew にあだな望みを抱かせ続けるが、彼が Maria への思いを口にすると、話題を変えたり、無視をしたりする。2幕3場では話題を変えるだけでなく、Olivia に求愛するための軍資金の必要性を思い出させることによって — “Thou hadst need send for more money” (II.iii.154) — Sir Andrew の感傷的な気分を打ち砕く。このように Sir Andrew が Maria への思いを口にすると Sir Toby が露骨に嫌悪感を示すのは、

彼自身が Maria のことを好きだから Sir Andrew にその思いを汚されたくないという気持ち作用するだけではなく、Olivia への求婚とは異なり Maria と Sir Andrew の結婚なら成立する可能性があり、自分の競争相手になる可能性が排除できないと思うからではないか。この場面は “cakes and ale” (II.iii.98-99) の陽気なお祭り騒ぎに通じる Sir Toby の “Come, come, I'll go burn some sacks, 'tis too late to go to bed now” (II.iii.159-60) で終わっているが、その直前の Sir Andrew のセリフ — “If I do not [call you 'cut'], never trust me” (II.iii.158) — はそれまでの Sir Andrew のセリフと打って変わった激しい調子を帯びている。つまり、Sir Toby が支配する副筋では “cakes and ale” の陽気なお祭り騒ぎが展開しているが、その陽気さの背後には陰湿な駆け引きの世界が存在する。そして Sir Toby と Maria の結婚は Sir Toby の側から見ても Maria の側から見たのと同様のことが言える。すなわち望みの全く持てない Olivia との結婚話を持ちかけては Sir Andrew から金を巻き上げていた Sir Toby がそれ以上相手をだまし続けることができないどころか、Sir Andrew と付き合うことで、彼の身にまで危険が及ぶことを知ると、友達付き合いをしていた相手を冷たく拒絶し、相手を出し抜いて結婚することを意味する。喜劇の動きはあらまほしき世界に向かう動きであるべきだが¹⁷⁾、Maria と Sir Toby の結婚は著しく poetic justice に反する。

IV.

Shakespeare の劇では主筋と副筋はテーマ上のつながりがあり、主筋の出来事を副筋が照射して強化することが多い。Maria と Sir Toby の結婚に嫌悪感を覚えた観客が主筋の 2 組の結婚について見直すときに、それらの結婚は一見したほどには望ましいものではなく、不快感を残すものであることがわかる。Dr. Johnson は Viola のことを船の難破で見知らぬ土地に着き、その土地の領主が独身であることを知ると、その領主の求婚者の立場を乗っ取ることを決意する “excellent schemer” であると評している¹⁸⁾。また Evans は Viola/Cesario は彼女のことを Sebastian と間違えて助太刀しようとした Antonio が Orsino の役人に連行されるときに驚いた様子を示すだけであるが、彼女は本当に何も気づいていないのかと疑問を呈している¹⁹⁾。さらには Levin は Viola が “schemer” であるという Johnson の見解を発展させている²⁰⁾。しかし、Viola に対してこのような見方をするのは少数派であり、ほとんどの批評家は Viola のことを絶賛している。たとえば H.B. Charlton は Viola のことを “inspiring and returning affection”²¹⁾ する才能を持っていると述べているし、Summers は “young, intelligent, zestful, she is a realist”²²⁾ と言っているし、Richard Henze は “embodiment of gracious, nearly divine *Twelfth Night* giving”²³⁾ だと言っている。New Penguin の編者²⁴⁾ も Arden の編者²⁵⁾ も Riverside の編者²⁶⁾ も伝統的な Viola 観を支持している。そしてフェステのエピローグは「祭りの解体の歌である」と主張した大修館の編者でさえ後述するように伝統的な Viola 観を支持している。しかし Viola は本当にほとんどの批評家が賞賛するような美德の権化であろうか。

Viola が Orsino の妻になりたいと思っていることを観客が初めて知るのは 1 幕 4 場である。Viola/Cesario は公爵の覚えがめでたくて公爵が彼女に彼の胸の内を打ち明けて、彼の

ために Olivia に求愛する命令を受けて “I'll do my best/ To woo your lady” (I.iv.39-40) と言った直後の “Yet a barful strife! / Whoe'er I woo, myself would be his wife” (I.iv.40-41) という傍白によってである。Charles Tyler Prouty はここで Viola が突然恋に落ちるのはエリザベス朝のロマンスの技巧に従うものだと述べている²⁷⁾。しかし、「妻になりたい」と思うことと「恋に落ちた」ことは同義語だろうか。もちろん同義語たり得ないわけではない。しかし愛することが相手を独占することではなくて相手の幸せを望むことであるなら、結婚を望まず相手の幸せのために自分が身を引くという選択もある。それこそまさに Viola/Cesario がすること、いや、それどころか彼女は本当は自分が Orsino の妻になりたいのに彼への愛故に恋敵のために誠心誠意尽くしているという反論があるかもしれない。しかし、Orsino と Olivia の恋の取り持ち役として、Viola は本当に誠意を尽くしているだろうか。

Olivia の館に着くと彼女は Olivia との接見が許されるために奇抜な方法を探っている。Malvolio の描写に脚色がないなら、Viola/Cesario は、お姫様はご病気だと言っても、お休みだと言っても、そんなことは先刻承知の上で来たと答え、お姫さまは会う気がないと言えば、それなら館の中に招じ入れられるまでドアの前で柱のように根をはやして待つと答える。Viola/Cesario がこのように強引な態度に出るのはもちろん普通に穏やかな方法でお目通りを願っただけでは前任者の Valentine のように追い返されるだけだからである。この人を食った奇抜なやり方が功を奏して Olivia にどんな人物か興味を持たせ、館の中に招じ入れられ、Olivia との間でウィットに富んだ受け答えをする。端麗な容姿とウィットの利いた話し方と堂々とした物腰という 3 拍子揃った Viola/Cesario に Olivia は引きつけられて Viola/Cesario は Olivia から “How does he love me?” (I.v.209) という問いを引き出すのに成功する。確かにここまでの Viola/Cesario の態度を見ていると、Orsino から与えられた使命を誠心誠意果たしているように思える。しかし問題は “How does he love me?” という Olivia の問いに対する Viola/Cesario の答えである。彼女はその問いに対して “With adorations, fertile tears, / With groans that thunder love, with sighs of fire” (I.v.210-211) と答えるだけである。これはいかにも紋切り型の答えであり、“How does he love me?” という Olivia の問いを引き出すまでに Viola/Cesario が見せた生き生きとした、オリジナリティに富んだところは感じられない。おそらくは既に Valentine の口からも聞かされてきたであろうこの陳腐な答えに対しては Olivia は今まで彼女がしてきた答えしか返すことができない。Olivia は “Your lord does know my mind; I cannot love him” (I.v.212) と答える。ここで注意しなくてはならないのは Olivia が条件的には Orsino が結婚相手として申し分のない人物であることを認めていることである。

Yet I suppose him virtuous, know him noble,
Of great estate, of fresh and stainless youth;
In voices well divulg'd, free, learned, and valiant,
And in dimension and the shape of nature,
A gracious person. (I.v.213-217)

それでも Olivia は兄への哀悼の気持ちを捨てて Orsino を愛することはできないのである。

このような人物に対して美辞麗句を並べても無駄である。このような気持ちの持ち主の心を揺り動かすことができるのは立派ではあるが魅力が感じられない人物ではなくて、この人ならという魅力を持つ人でなければならぬからである。Olivia から結婚の承諾を得られなかった Viola/Cesario は自分なら Orsino の様に激しく恋をしている時にそんな情けない返事しかもらえなかったら真意がはかりかねると言う、Olivia は “Why, what would you?” (I.v.222)と聞く。すると Viola/Cesario は次のように答える。

Make me a willow cabin at your gate.
And call upon my soul within the house;
Write loyal cantons of contemned love,
And sing them loud even in the dead of night;
Hallow your name to the reverberate hills,
And make the babbling gossip of the air
Cry out “Olivia!” O you should not rest
Between the elements of air and earth
But you should pity me!(I.v.223-231)

“How does he love me?” と Olivia に聞かれたときの紋切り型の答えに比べて、この答えは何と生き生きとしてロマンチックな言葉だろうか。たとい、おせじと解っているときでもこのような言葉で求愛されて悪い気がする女性はいないであろう。この場合、この言葉は Orsino の従者として Viola/Cesario が Olivia の前で示してきた魅力的な態度と一脈通じるところがあるので、Olivia がこの人なら本当にそうするかもしれないと思うのは当然である。しかしこれは “With adorations, fertile tears,/With groans that thunder love, with sighs of fire” という紋切り型の答え方しかできない人物には期待できそうにもないことである。条件的にはどんなに優れていても、求愛するのに自ら出向く手間を省いて他人に任せて誠実さの感じられない紋切り型の求愛の仕方をするように思える人物と、条件的には問題があるが誠実に見え、機知に富み、ロマンティックな人物を比べてみると後者の方に惹かれるのは自然な乙女心である。Viola/Cesario はこのセリフの後で Olivia が使いの駄賃を払おうとするときにもきっぱりと断り、品位のあるところを見せる。容姿、言葉、態度の3拍子が揃っている、Olivia は Viola/Cesario にすっかり参ってしまう。

Viola/Cesario を恋の使いとして送るときに Orsino は Olivia にお目通りが叶ったら “act [his] woes” (I.v.25)するように命令していた。Viola が演技力のある人物であることは見てきたとおりだが、何故、あれだけの演技力と当意即妙の答えで聞く者を引きつける力を持っている Viola が “How does he love me?” という問いを引き出した肝心の時に紋切り型の答えを返すだけで、Orsino への関心を引きつけるのに失敗するだけでなく、むしろ、関心を背けるようなことをするのだろうか。“With adorations...” のセリフは Orsino 自身の言葉に比べても見劣りがする: “The parts that fortune hath bestowed upon her...I hold as giddily as fortune;/But 'tis that miracle of gems/That nature pranks her in attracts my soul” (II.iv.79-82). Viola/Cesario は本当は Orsino に対する Olivia の恋心を喚起したくなかったのではないか。

V.

“I would be his wife” (I.iv.41)と言うセリフが Orsino に対する恋の告白ではなくて、彼の妻の座につきたいという意志を表しているという解釈し得るにしても、その後、何度も Orsino への恋を口にしていないかという反論があるかもしれない。特に真実の恋の告白と思える “Patience on a monument” の有名なセリフをどうするのかという問題が残る。このセリフについて安西徹雄は次のように述べている：

この時、ヴァイオラのせりふは、現に今、舞台上に立ち尽くしている彼女自身の姿を、自らの言葉によって形象化するという効果を持つ——というよりむしろ、逆にいうなら、言葉のつむぎ出す想像上のイメージがその彼女自身の姿の上に投影されて、今舞台上に立って語っているヴァイオラは、そのまま花心を虫に食い荒らされて枯れ朽ちてゆくバラとなり、悲しみにほほえみかけている「忍耐」の像そのものとなる。²⁸⁾

至言である。しかし問題は Viola が本当に “Patience on a monument” のセリフが聞き手に与えるイメージ通りの人物かということである。“worm i' th' bud” (II.iv.107)や “feed” (II.iv.108)や “pine” (II.iv.108)や “melancholy” (II.iv.109)などの語が使用されていることに加えて「ルネサンス期には納骨堂などによく『忍耐』『希望』など寓意的な彫像が建てられていた」²⁹⁾ので “Patience on a monument” のセリフは死を連想させる。だからこのセリフを聞くと Orsino でなくても “But died thy sister of her love?” と心配したくなる。しかしこの劇の中の Viola/Cesario についての描写は一貫して女性性と若さを強調している。たとえば Orsino は Viola/Cesario のことを次のように描写している。

Dear lad, believe it,
For they shall yet belie thy happy years
That say thou art a man: Diana's lip
Is not more smooth and rubinous; thy small pipe
Is as the maiden's organ, shrill and sound
And all is semblative a woman's part.(I.v.28-33)

Olivia の館を訪れた人物の特徴を説明するときに Malvolio も同様のことを述べている。そもそも Olivia に求愛するのに Orsino が自らおもむかずに Viola/Cesario を使いに出す大きな理由は “She will attend it better in thy youth/ Than in a nuncio's of more grave aspect” (I.v.26-27)だと判断したからであるし、実際に Olivia が Viola/Cesario に恋したのは、彼女の弁舌や態度だけではなく、容姿も一役買っていた：“Thy tongue, *thy face, thy limbs, actions, and sprit, /Do give thee five-fold blazon.*” (I.v.247-248 強調筆者)しかし、若い女性でも生死を尋ねたくなるほどやつれているときには、声は低くなるし、唇も、ほったも血の気を失い、皮膚はかさつき、老けた様相を呈する。秘めた恋心故に生死を尋ねたくなるほどやつれることが真実の恋だと言う Viola/Cesario の恋の定義が正しいなら、やつれるどころか男装をしても隠しようがないほどの若さと女性らしさを保持して Orsino や Olivia を魅了する Viola は真実の恋をしていないことになる。

“Patience on a monument” のセリフの詳細な検討が示唆することは真実の恋人と実際

の Viola/Cesario の外見の差だけではない。Viola/Cesario が “Patience on a monument” のセリフを口にするのは 1 回目の使いで Olivia から色好い返事をもらうことができなかった Orsino が再度 Viola/Cesario を Olivia の元へやろうとする時である。彼女は恋心は必ずしも満たされぬことがあるし、それを受け入れなくてはならないと言って、この有名なセリフを言う。しかし Viola は何故ここで Orsino にあきらめろと言うのだろうか。なるほど 1 回目の使いで Viola/Cesario は Orsino のために色好い返事をもらってることができなかった。しかし彼女は Olivia が決して本当に兄への哀悼の意で凝り固まっていて浮ついた話は受けそうもない人物ではないことを知ったはずである。それどころか decorum に反して Viola/Cesario に指輪を贈って、彼女の心を伝えようとさえした。Viola/Cesario に恋をしたということは Olivia には恋を受け入れる心準備ができていたことを意味する。しかも Olivia は Orsino のことを好きになれないまでも立派な人物であることを認めていたことは既に見てきた通りである。このことは Olivia に対する Orsino の働きかけかた次第では彼女の心を勝ち得る可能性がゼロではないことを示唆しはしないだろうか。人を立てて求愛するよりも自ら出向いて真情を吐露し、彼なりの良さを解ってもらうことの重要性を Viola/Cesario は何故 Orsino に忠告しないのだろうか。

それでもなお、問題が残る。Orsino が Viola/Cesario に裏切られたと思って Cesario 殺しを口にする時に Viola/Cesario が愛する Orsino のためになら喜んで何度でも死ぬと言って Orsino についていくことをどう解釈するのかという問題である。「人がその友のために命を捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません」³⁰⁾とは聖書も認めることである。しかしここで Orsino が Viola/Cesario を殺そうとするのは、恋の使者として送ったのに Olivia を横取りしたと思うからである。もしここで Viola が男装をやめて女性であることを証明し、Olivia を横取りし得ないことを証明すれば、Orsino の疑いは直ちに晴れる。敢えて疑いを晴らすために男装をやめようとせずに死を選ぶことこそ Viola の愛の証だと言う反論があるかもしれない。しかし、死を選ぶことは最後まで Orsino をだまし続けることを意味する。性別や身分という重大な事実を詐称している相手との間に愛や信頼関係が成立しうるであろうか。重大な事実を偽ったまま死んでも、それは犬死に過ぎないのではないか。

VI.

“Patience on a monument” のセリフや Orsino のためになら喜んで何度でも死ぬというセリフのインパクトが強いので Viola の「無力」で「受動的」で「悲劇的」に見える側面が観客の印象に残るきらいがあるが、Viola は加害者でもある。Viola/Cesario のことを Sebastian と間違えた Antonio は決闘の助太刀に入って Orsino の役人に逮捕されるが、もし、Viola が変装していなければ彼女のことを Sebastian と思って助太刀にはいることはなかったであろうから、彼が逮捕されることはなかったであろう。Viola は最初から Sebastian が生きている望みを抱いていたし、Antonio の話の中には Sebastian という名前が出てくるし、海難救助の話も出てきて状況証拠が揃っているのに無知を装うのは問題に巻き込まれたくないからではないかという Bertrand Evans の指摘³¹⁾は正しい。百歩譲って彼女が

本当に Antonio の話に半信半疑であるにしても、決闘で殺されるかもしれなかったところを救ってくれた命の恩人に対して彼女が示す態度はあまりにもお粗末である³²⁾。Viola は Orsino の役人が Antonio を逮捕したときに何故、この人は自分を助けてくれた人だと言って弁明してやろうとしなかったのだろうか³³⁾。Richard Henze は Viola と異なり Antonio の親切心は絶対的なものではないから、捕まると親切にすべきだったのか疑問に思い始めると述べている³⁴⁾が本当に Viola の方が Antonio よりも親切だろうか。Antonio が先刻預けた財布を返して欲しいと言ったときに Viola/Cesario が渡す金はそのときに彼女が持ち合わせていたお金の半分だけである。Viola は変装によって姿は兄の Sebastian に似ていても、Sebastian そのものではないから、預けた財布と言われても話が通じないのは当然である。しかし Sebastian を海から救った Antonio は彼の財布の中からお金を半分取り出してそれを Sebastian に渡して、必要があれば使ってくれと言ったのではなく、財布をそのまま Sebastian に預けた。しかも Antonio は Sebastian に要求されて渡したのではなくて、自発的に渡した。この2つは極めてよく似た行為であり、いずれも舞台上で行われる。その上、変装することによって Viola は Sebastian と見かけの区別がつかないので繰り返しの様な感じがする。それ故に Antonio が Sebastian に渡すときには財布そのままであったのに、Sebastian と同じ外見をしている人物が Antonio に渡すときには相手に催促されて不承不承半分だけ渡すことは観客の印象に残る。

Antonio が浮き彫りにするのは Viola の親切心の欠如だけではない。Antonio はお尋ね者なので初めは Sebastian の後を追いかけるのを躊躇したが、Sebastian への友情がためらいに打ち勝って危険をも、ものともせず Sebastian の後を追った。Antonio の話を聞いて Illyria の町で顔を見られるのが危険なら大っぴらに歩くなと Sebastian が忠告すると Antonio は、それは性には合わないときっぱりと拒否して堂々と素顔をさらして歩いて捕まる。それに対して Viola には明確な危険があるわけではないのに変装して Orsino の小姓の職を得ている。危険を認識しつつも小細工したりせずに正々堂々と振る舞う Antonio の態度は保身のために変装する Viola の欺瞞を浮き彫りにする。

財布などは知らないと言うときに Viola は “I hate ingratitude more in a man/ Than lying, vainness, babbling drunkenness/ Or any taint of vice whose strong corruption/ Inhabits our frail blood” (III.iv.305-308) と言うが、Viola が恩知らずであることは Antonio が Orsino の役人に連行された後の Viola のセリフにも示唆される。

He named Sebastian. I my brother know
 Yet living in my glass; even such and so
 In favour was my brother; and he went
 Still in this fashion, colour, ornament,
 For him I imitate. O, if it prove,
 Tempests are kind, and salt waves fresh in love!(III.iv.330-335)

このセリフの中で Viola はもし Antonio の言ったことが本当なら兄は生きていることになると言って喜ぶが、もし本当なら自分の命の恩人である Antonio は兄への友情故に兄と同じ格好をしている自分を兄と間違っただけで助けようとして逮捕されたことになるということとは

全く考えもしない。これによく似た Viola の忘恩は彼女を海から救い出し、小姓として Orsino に仕えるための口利きをしてもらった船長に対する彼女の態度からも窺い知ることができる。この劇の終わりで “Cesario” は実は Viola が Sebastian を真似て男装していた姿であることが判明して Viola が Orsino と結ばれることになる時に、公爵が Viola に女の衣装を身につけたところを見せてくれと言う。その時に初めて彼女は服は自分を助けてくれた船長が保管しているが、その船長は Malvolio に訴えられて獄につながれていると言う。逆に言うならば、彼女は難破したときにさんざん世話になったのに服を取り戻すために船長のところに行く必要が生じなければ船長の境遇を全く気にも留めない。

加害者としての Viola の側面は血まみれになって登場する Sir Toby と Sir Andrew によっても暗示される。Sir Toby と Sir Andrew が血塗れになって登場するのはその前に Viola/Cesario と Sir Andrew が決闘したときに Viola/Cesario が憶病であるばかりか、卑怯でもあると感じた Sir Toby が Sir Andrew をけしかけて Viola/Cesario を切りつけさせたところ、彼らが “Cesario” と思って襲いかかった相手が Sebastian であり、彼らの方がやられたからである。先に切りつけたのは Sir Andrew の方なので Sebastian が彼らに深手を負わせたのは正当防衛である。しかも彼らに大怪我をさせたのは Viola/Cesario ではなくて Sebastian であるから Viola/Cesario が直接的にはなんらの責任もないことは確かである。しかし、Sir Toby が Sir Andrew に襲撃するようにけしかけたのは Sir Andrew も Cesario も腰抜けなので2人の喧嘩は子どもの喧嘩同様に無害な娯楽になる — Sir Toby 自身の言葉を用いるなら “t will be nothing” (III.iv.344) — と思ったからである。相手が Sebastian ではなく男装している双子の妹の Viola/Cesario であったなら、Sir Toby の予想通りになったであろう。つまりもし Viola が男装していなければ彼らは深手を負わずにすんだのである。

Cristina Malcolmson は Orsino と結婚したいという Viola の願望が認められ得るのに対して Olivia と結婚したいという Malvolio の願望が認められ得ないのは、身分の低い者が高い者と結ばれたいという願望は恋に動機づけられている限りは認められ得るが自己中心的なときは認められないからであると説明している³⁵⁾。しかし Viola は今まで議論してきたように決して “Patience on a monument” のセリフや Orsino のためなら何度でも死ぬというセリフで連想されるような愛の権化ではなく、むしろ Malvolio 以上に他者への思いやりに欠ける女性である。この劇の終わりで Viola と Orsino の結婚は予告されるだけで、舞台上で彼らの結婚の披露宴が行われはしない。それどころか、観客は劇の終わりで女性の服を着た Viola の姿を見ることすらしないのは、Viola が Orsino と結ばれて身分が上昇することは Maria と Sir Toby の結婚と同様に poetic justice に反するものだからではないか。

VII.

Sebastian と Olivia の結婚は、Sir Toby と Maria の結婚や Viola と Orsino の結婚の様に他者を蹴落としての上がるという印象を与えはしない。だが Sebastian と Olivia の結婚もまた別の意味で観客に不快感を与える。何故なら Olivia が Sebastian と結婚したのは彼のことを Cesario だと思った間違いに基づくものだからである。Sebastian が Cesario

の存在を知らないことは確かである。しかし Olivia が彼と Sir Toby の喧嘩の仲裁に入ったときに Olivia は Sebastian に向かって“Be not offended, dear *Cesario*” (IV.i.43 強調筆者) と呼びかけているのだから、*Cesario* の存在を知らなくても、人違いされていることに気づいても不思議ではない。見知らぬ2人連れにいきなり襲撃された直後だから気が動転して呼びかけられた名前が違っていただけに気づかなくても当然だという反論があるかも知れない。だが Sebastian 自身、その結婚は何かがおかしいことに気づいている:

For though my soul disputes well with my sense
That this may be some error, but no madness,
Yet doth this accident and flood of fortune
So far exceed all instance, all discourse,
That I am ready to distrust mine eyes,
And wrangle with my reason that persuades me
To any other trust but that I am mad,
Or else the lady's mad;(IV.iii.9-16)

“though...yet” の構文や “wrangle” という言葉が使われていることに加えて、“soul” や “sense” や “reason” などの語が用いられているので観客や読者はあたかもここで相対立する重大な概念が述べられているように思うが、このセリフを入念に検討すると、ここで問題になっているのは「error か madness か」にすぎないことがわかる。つまり、Olivia との結婚は “madness” ではないにしても “error” に基づいた結婚である可能性が残っていることを認識しつつ、結婚の承諾をしていることがわかる。それは Maria の偽の手紙の “M.O.A.I. doth sway my life” (II.v.91)の件を読んでそのままでは自分の名前と合致しないから何とか合致させようと試みる Malvolio の姿と似ている。いや、上で引用したセリフの続き — “There's something in't/ That is deceivable” (IV.iii.20-21) — を考慮するならば Sebastian の方がより打算的であるとさえ言えるかもしれない。Malvolio は一方ではお姫さまと結婚することによって社会的に上昇することを夢想する野心家であるが、他方では “all that look on him love him” (II.iii.128)と思う、人を疑うことを知らない間抜けな側面を持っている。ある意味では Malvolio が破滅するのは彼が疑うことを知らないからである。“error” にせよ、“madness” にせよ、正常な状態でないことに変わりはないのに、何故 Sebastian が “error” と “madness” の違いにこだわるのかと言えば、“error” である場合、相手は困るかもしれないが自分には何の被害もないのに対して “madness” である場合には、気が狂っているのが Olivia にせよ自分にせよ自分の側にも被害が及ぶからである。つまり相手はいつでも良いが自分がだまされているかどうかを慎重に見極めようとしているのである。

“error” と言っても実際には彼は *Cesario* つまり男装している彼の双子の妹の Viola と間違えられているだけであり、*Cesario* は本当は女で Olivia と結ばれようがないから error であるかどうかは問題になりようがないという反論があるかもしれない。この点に関して Porter Williams, Jr.は、Viola を恋する間違いが Sebastian に一目惚れをする準備をしたと言っている³⁶⁾。また、Leonard Tennenhouse は、Sebastian は Viola と同じ血を分けていて、そもそも彼女が変装するときに彼女自身が成りすました人物であると言っている³⁷⁾。

Helen Moglen³⁸⁾や Karen Greif³⁹⁾や D.J.Palmer⁴⁰⁾や Karen Newman⁴¹⁾も同様の見解をしている。男装するさいに Viola が兄の格好を真似ること自体が Sebastian と Viola を一体化しようとする行為とみなされ得るし、既に何度も言及している“Patience on a monument”のセリフの終わりで Viola は “I am all the daughters of my father's house,/And all the brothers, too” (II.iv.116-117) という謎めいた言葉によって、自分と兄を一体化させようとしている。そして Cesario と Sebastian を初めて同時に見たときの Orsino の “One face, one voice, one habit, and two persons-/A natural perspective, that is and is not!” (V.i.200-201) という驚きの表現は Viola と Sebastian の一体化を是認するように思える。だから真相が判明したときに Sebastian が次のように言うのは全く自然なことに聞こえるかもしれない：

So comes it, lady, you have been mistook.
But nature to her bias drew in that.
You would have been contracted to a maid;
Nor are you therein, by my life, deceived;
You are betrothed both to a maid and man. (V.i.243-247)

しかし Orsino のセリフを注意深く読むと Orsino は 2 人の “face” や “voice” や “habit” の同一性に驚嘆しつつも 2 人が重ね合わさって 1 人になるのではなく、2 人は 2 人であると述べていることがわかる：“One face, one voice, one habit, and *two persons*” (強調筆者)。実際この劇を詳しく見ると、今見てきたような Sebastian と Viola を一体化させる動きを覆し Sebastian と Viola は別個の人格を備えた人物であることを示唆するより大きな動きが存在することに気づく。たとえば Sir Andrew と Sir Toby が Sebastian のことを “Cesario” だと思って襲いかかり深手を負うのは Viola の変装の欺瞞を示唆するだけではなく Cesario つまり Viola と Sebastian は少なくとも剣術の腕前は違うということをも示唆する。Antonio に預けたお金を返してくれと言われたときに Viola/Cesario に Antonio の言っていることの意味が通じなかったことも Sebastian と Viola は少なくとも船が難破してから 2 人が再会するまでの彼らの経験は異なるので、彼らを完全に一体化しようとするには無理があることを示唆している。2 人の違いは Feste に対する対応の仕方の相違でより鮮明に示されている。2 幕 1 場で Olivia の館の前で道化に出会った Viola は道化とウィットの応酬をして道化に “You have said, sir. To see this age!” (III.i.9) と言わしめ、彼女自身も道化の当意即妙な答えに “This fellow is wise enough to play the fool,/And to do that well craves a kind of wit” (III.i.50-51) と言って感嘆する。それに対して 4 幕 1 場でやはり Olivia の館の前で道化に出食わした Sebastian は道化の頓知を楽しんだり、ましてや道化と頓知の競演をするどころか道化ぶりに対してあからさまな嫌悪感を示す：“Go to, go to, thou art a foolish fellow; Let me be clear of thee” (IV.i.2-3); “I prithee vent thy folly somewhere else” (IV.i.8); “I prithee, foolish Greek, depart from me” (IV.i.15)。この道化に対するあからさまな嫌悪感は Viola との類似性よりもむしろ道化が Malvolio イジメに加担する原因になった 1 幕 5 場の Malvolio の道化評 “I marvel your ladyship takes delight in such a barren rascal...unless you laugh and minister occasion to him, he is gagged”

(I.v.67-71)を観客に思い出させる。

“Cesario”と Sebastian の違いはまだ他にもある。Viola/Cesario はまず “comedian” を演技することによって、Olivia の関心を引き、会話に引き入れた。同様に “Patience on a monument” のセリフでも架空の妹の話に託して語ることによって Orsino の心に訴えかけている。この劇の中で Viola が最も生き生きと描かれているこの 2 例から Viola は間接的な表現を得意としていることがわかる。他方 Sebastian は彼自身の言葉として、率直に語る表現様式を好む。道化に対する対応の仕方や言語表現様式の違いは一見したところ、ささいな違いに思えるかもしれない。しかし、Olivia の心をとらえ、decorum に反していると知りつつも、自制心を抑えることができないようにした主たる原因は人の心に訴えかける Viola/Cesario の間接的表現様式と機知に富んだ会話であったので、Orsino の使いで Olivia に求愛に行ったのが Viola/Cesario ではなくて Sebastian であったなら Olivia が恋に落ちることはなかったであろう。

以上の点を踏まえた上でもう一度、先ほど引用した Sebastian のセリフに戻ると、決して Sebastian が主張するように “Nor are you therein by my life, deceived” とは言えないことに気づかざるを得ない。Leggatt は、真相を知った後で Olivia が Sebastian に話しかけることは決してない。そして彼女の結婚への唯一の言及は Orsino に語りかけるものであり、結婚の儀式的な局面を強調している、と指摘しつつも、彼女と Sebastian のペアは形式的な構想の一部だとみなすことが薦められている、と結論づけることによって、この劇が happy ending であるという解釈にかろうじて、とどまり続けている⁴²⁾。しかし、Olivia の Orsino への語りかけは「結婚の儀式的な面」を強調しているのではない。Olivia は Orsino に次のように言う：

My lord, so please you, these things further thought on,
To think me as well a sister as a wife,
One day shall crown th' alliance on't, so please you,
Here at my house, and at my proper cost. (V.i.295-98)

これは今までの Olivia の Orsino に対する態度と 180 度異なる優しい言葉である。結婚相手の Sebastian には語りかけずに、かつての自分の求愛者に優しく語りかけ、しかも自分の夫の前で “to think me as well a sister as a wife” (強調筆者) と言うことは、真相を知って Olivia の気持ちが Sebastian から離れて Orsino へ向かっていることを暗示してはいないか。Sebastian には何の相談もせず、いきなり Orsino に親戚の縁組みの話をして、しかも Olivia の負担で、Olivia の館で披露宴をするという具体的な内容まで提案し、Orsino がその提案を受けていることは、観客にあたかも Olivia と Orsino が結ばれるかのような錯覚をもたらす。そしてこのことは、もし Viola/Cesario が Olivia の心を Orsino からそらすような働きかけをしなければ、そして、もし Sebastian が “error” と感じつつ Olivia との結婚を承諾したりしなければ、たとい、時間がかかるにしても Orsino と Olivia が結ばれる可能性が完全に排除されはしなかつただろうことを示唆する。

結び

Twelfth Night は通常指摘されている以上に暗い劇である。そしてその劇は決して単に Malvolio の捨てゼリフや Sebastian に裏切られたと思ったときに Antonio が言うセリフの激越な調子や最後の道化の歌などの周辺の要素の故に happy ending が脅かされているだけではない。この劇の終わりで Fabian に述べられる Maria と Sir Toby の結婚は、一方では結婚によって身分が上昇することを夢想する Malvolio を嘲笑し、その自惚れを利用して彼を策略にかけて破滅させた Maria が Malvolio を出し抜いて身分を上昇させることを意味し、他方では、結婚を持ちかけては Sir Andrew から金を巻き上げていた Sir Toby が、Sir Andrew が本当に友を必要とするときに冷たく拒絶し、相手を出し抜いて結婚することを意味する。この著しく poetic justice に欠く結婚は副筋の中に見られるだけでなく、主筋の2組の結婚も同様に観客に不快感を与える。つまり、*Twelfth Night* は Malvolio の捨てゼリフや Antonio のセリフや道化の歌故に喜劇性が脅かされているのではなく、この劇の中で達成される結婚そのものの中に後期の問題劇の中に見られるような不快感が存在していると言うことができる。

注

- 1) The New Cambridge Shakespeare *Twelfth Night*, ed. Elizabeth Story Donno (Cambridge: Cambridge UP, 1985) II.iv.111. テキストはこの版を用いた。以下テキストからの引用は本文中に幕、行数のみを記す。
- 2) W.H. Auden, *The Dyer's Hand and Other Essays* (1963; London: Faber and Faber, 1987) 520.
- 3) Jan Kott, *Shakespeare Our Contemporary* trans. Boleslaw Taborski (New York: Norton, 1974) 284.
- 4) Philip Edwards, *Shakespeare and the Confines of Art* (1968; London: Methuen, 1981) 63.
- 5) 大修館シェイクスピア双書『十二夜』安西徹雄編注 1987年の解説, pp.48-49.
- 6) Samuel Johnson, *The Plays of William Shakespeare* (1765) rep. *The Critical Heritage William Shakespeare* 6 vols. (London: Routledge, 1979) 5:109.
- 7) S.C. Sen Gupta, *Shakesperian Comedy* (1950; Oxford: Oxford UP, 1979) 149.
- 8) E.M.W. Tillyard, *Shakespeare's Problem Plays* (1950; Harmondsworth: Penguin, 1985) 98.
- 9) Richard Levin, *Love and Society in Shakespearean Comedy* (Newark: U of Delaware P, 1985) 117.
- 10) Dymna Callaghan, *Textual Practice*, 7 (1993) rep. “‘And all is semblative a woman's Part’: Body Politics and *Twelfth Night*” *Twelfth Night New Casebooks* (London: Macmillan, 1996) 137.
- 11) T.W. Craik, introduction, *The Arden Shakespeare Twelfth Night* ed. J.M. Lothian and T.W. Craik (1975; London: Methuen, 1983) xcvi.
- 12) Anne Barton, introduction “*Twelfth Night*”, *The Riverside Shakespeare* ed. G. Blakemore Evans and J.J.M. Tobin, 2nd ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1997) 441.
- 13) Donno, 23.
- 14) M.M. Mahood, *The New Penguin Shakespeare Twelfth Night* (1968; London: Penguin, 1995) 39.
- 15) たとえば Geoffrey H. Hartman, *Shakespeare and the Questions of Theory*, ed. Patricia Parker and Geoffrey Hartman (1985) rep. “Shakespeare's Poetical Character in *Twelfth Night*” *New Casebooks* 31. や Peter Phialas, “*Twelfth Night*” in *Shakespeare's Romantic Comedy: The Development of their Form and Meaning* (1966) rep. *Shakespearean Criticism* 34 (1997): 277.

- 16)Richard Henze, "Twelfth Night: Free Disposition on the Sea of Love" *The Sewanee Review* LXXXIII, No.2, Spring, 1975 rep. *Shakespearean Criticism* 34:291.
- 17)Northrop Frye, *Anatomy of Criticism* (1957; Princeton: Princeton UP, 1973)164.
- 18)Johnson, 109.
- 19)Bertrand Evans, *Shakespeare's Comedies* (1960)rep. "The Fruits of the Sport" *Shakespeare: Twelfth Night Casebook Series*(London :Macmillan, 1972), 167.
- 20)Levin, 117-52.
- 21)H.B.Charlton, *Shakespearean Comedy* (1938; London: Methuen, 1979)286.
- 22)Joseph H. Summers, *University of Kansas City Review* XXII(1955) rep. "The Masks of Twelfth Night" Casebook, 93.
- 23)Henze, 288.
- 24)Mahood, 34.
- 25) Craik, xciii.
- 26)Barton, 440.
- 27)Charles Tyler Prouty, "Twelfth Night" *Stratford Papers: 1965-67* rep. *Shakespearean Criticism* 34:326.
- 28)安西徹雄『この世界という巨きな舞台』ちくまライブラリー11 (筑摩書房, 1988)91.
- 29)安西, 大修館シェイクスピア双書『十二夜』の注, 140.
- 30)ヨハネによる福音書 15 章 13 節
- 31)Evans, 168.
- 32)観客は彼女の相手の Sir Andrew が腰抜けであることを知っているが、彼女は相手のことを "the most skilful, bloody, and fatal opposite" (III.iv.226)であると思いこまされている。Sir Toby が相手から決闘の真似事をするだけで怪我を負わせないと言う約束をとりつけたと言った後でもまだ彼女は最悪の事態を想像して恐がっていた。
- 33)後に Orsino に対しては自分を助太刀してくれた旨を告げるが "But in conclusion put strange speech upon me, / I know not what 'twas, but distraction" (V.i.56-57)と付言することによってお尋ね者との関係を否定しようとする。
- 34)Henze, 292.
- 35)Cristina Malcolmson, *The Matter of Difference: Materialist Feminist Criticism of Shakespeare* ed. Valerie Wayne (1991)rep. "'What You Will' : Social Mobility and Gender in Twelfth Night" *New Casebooks* 171.
- 36)Porter Williams, Jr., *PMLA* LXXXI(1961)rep. "Mistakes in Twelfth Night and their Resolution" Casebook, 181.
- 37)Leonard Tennenhouse, *Power on Display: The Politics of Shakespeare's Genres*(1986) rep. *New Casebooks*, 87.
- 38)Helen Moglene, "Disguise and Development: The Self and Society in Twelfth Night" *Literature and Psychology* XXIII No.1(1973) rep. *Shakespearean Criticism* 34: 314.
- 39)Karen Greif, "Plays and Players in Twelfth Night" *Shakespeare Survey* 34(1981) rep. *Shakespearean Criticism* 34: 319.
- 40)D.J.Palmer, *Critical Quarterly*, IX 3(1967) rep. "Art and Nature in Twelfth Night" Casebook, 214.
- 41)Karen Newman, *Shakespeare's Rhetoric of Comic Character* (New York: Methuen, 1985), 104.
- 42)Alexander Leggatt, *Shakespeare's Comedy of Love* (1974; London: Methuen, 1980) 250.